



TITLE:

第五回測地學地球物理學國際會議 (皇太子御降誕奉祝)

AUTHOR(S):

CITATION:

第五回測地學地球物理學國際會議 (皇太子御降誕奉祝). 天界 1933, 14(153): 91-92

ISSUE DATE:

1933-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165466>

RIGHT:

第五回測地學地球物理學國際會議

去1933年九月14日から同23日までの10日間、ボルトガル國リスボン市に於いて測地學地球物理學國際同盟第5回總會 The Fifth Assembly of the International Union for Geodesy and Geophysics が開かれ、我が日本國からは田中館愛橋博士、新城新藏博士、川崎俊一理學士が代表として出席された。議長は、同盟創立以來の M. Ch. Lallemand 氏であつたが、此の會合で規則改正の結果、重任せざることとなり、次期は米國の W. Bowie 博士が就任、又、幹事は英國測量局長 H. St. J. L. Winterbotham 氏が就任することとなつた。英國代表の提議により、次き3ヶ年間各國からの納付金は25%減額することとなり、尙ほ、インドやインドシナの如き一般民衆の文化教養の低い國の納付金は適當に減ぜられることとなつた。

會議中の重要問題は、緯度變化と經度測定とに關する件であつた。水澤緯度觀測所長木村博士(缺席)からの報告によれば、目下、國際的協同の緯度變化觀測をやつてゐる所は北緯 $39^{\circ}08'$ の線に沿ふて5ヶ所(水澤、伊の Carloforte, 露の Kitab, 米の Gaithersburg と Ukiah と)、南緯 $34^{\circ}55'$ の線に2ヶ所(Adelaide と La Plata)、及び赤道に近い Batavia とで、近來甚だ盛んである。ところが、木村博士が健康の故を以つて遠からず辭職される意志である 旨が此の會議で發表されたとかで、來會者は甚だ残念に思つたが、將來のことについては國際天文協會とも協議することとなつた由。

國際經度觀測は1933年十月1日から十一月30日までと定められてあるが、成るべくは十二月15日まで繼續されることが望まれた。プログラムは1926年の通りであるが、基準點は北半球では、

a) グリニチ——東京——ザンクイザ——オタワ

b) アルジェ——上海——サン・デiego

南半球では

c) ケイプ——アデレイド——エリントン——プエノス・アイレス

尙ほ、パリとワシントンとが之れに加へられる。此の觀測には北緯 65° から南緯 42° にわたる全世界86ヶの天文臺が参加し、上記3緯線の基準を連絡するた

め、赤緯 0° — $+20^{\circ}$ の中の40ヶの基本星が撰定され、此等のものの若干と、天頂星との観測が行はれるのである。特に、クロノグラフと無線受信装置の記録に於ける lag が注意を促がされてゐる。最後の結果整理はパリにある Bureau International de l'Heure で行はれる筈。

會議は excursion 其の他多くの社交的な催しも含まれ、大統領の閲見や、Coimbra 及び大學への見學等もあつた。又、佛國の H. Deslandres 氏には名譽學位が大學から贈られた。

次の第6回總會は、1936年に英國エデンバラ市で開かれる筈。

花山の國際經度觀測終る

去1926年の秋に全世界の天文臺で行はれた 第一回國際經度觀測の成績により、1933年には第二回の觀測プログラムが作られ、我が日本でも花山と三鷹の兩天文臺が之れに参加した。

花山天文臺は1929年の創立であるから、第一回の國際經度觀測には間に合はなかつた。それで、こんどの1933年の觀測が初めてのものであつた。之れがためには、學術振興會から補助金が出附されたので、去る夏以來、花山では、いろいろ準備が進められ、いよいよ去る九月1日から觀測は開始された。

觀測者は山本臺長、稻葉理學士及び高城武夫氏の三人で、毎夜二人づつ交代して觀測當番となり、更に其の當番二人が、觀測者と記録者とを交互に勤めた。

器械は、口径90耗のバムベルグ會社製の子午儀、それに自記測微尺を付け、倍率120倍の接眼鏡を使用した。又、クロノグラフはケンブリヂ式のものをを用ゐた。

標準時計としては本館地下室に裝置されてあるリフラーと、ショットと、兩種の恒星時振子時計を用ゐ、リフラーの補助時計を無線室に置いて、之れで無線時報を聴取し、ショットの補助時計は子午儀室に置いて、直接に觀測用として、クロノグラフを働かせた。——毎日、午前11時と午後9時に船橋の無電局の時報を取り、尙ほ、毎朝4時には佛領インド・シナのサイゴン無電局の時報を取つた。其の他、時々、蘭領ジャバのマラバヤ、其の他の無